

編集/コンビニの会事務局
連絡先/〒452-0807 名古屋市西区歌里町147番地
TEL/FAX(052)505-6082(コンビニハウス)

障害をもつ人たちの地域生活を支援する

特定非営利活動法人
コンビニの会

定価/150円
昭和54年8月1日第三種郵便物承認

第143号



坂乃茶屋のご夫婦

「坂乃茶屋」

旅の景色の中で…

自然写真家 河嶋 秀直

奈良の飛鳥に皆に親しまれていたお土産・
お食事処があった。

店内には沢山の色紙が壁や天井にびっしり
貼られていたが、そのほとんどがお店を訪れ
た学生たちのものだった。

僕が、そのお店に初めて訪れたのは四十二
年も前の事、その縁が今でも続いている。

兎にも角にもお店を営んでいたご夫婦の心
遣いにファンクラブまで出来るほどのお店。

佇まいは、今風で言えば古民家、そこで三
輪素麺や葛切り、ワラビ餅などを出していた。

テレビの取材を受けたり、ドラマの舞台に
使われた事もあり有名なお店になったが、昔
と変わらない温かいお店だった。

毎年一月二日に年始挨拶に伺っていたが、
大雪が降って行けなかった五年前のその日、
原因不明の出火により焼失してしまった。

幸い、お店と住居は別だったもので、ご夫婦
がご無事だったのが、せめてもの救い。

(次頁へ)

焼けたお店を見て、ご夫婦は「これも神の思し召し」とぼつり：、そうやって、自分を納得させるしかなかったのかもしれない。

お店は無くなってしまうたが、「坂乃茶屋」は、たくさんの人の心に残っている。

お店を惜しむ人たちで当時の写真などを持ち寄る事にしたら、たくさんの写真が集まり、その量はお店がいかに大切に思われていたかを表していた。

人との縁とは不思議なものです。

「袖すりあうも他生の縁、躓く石も縁の端」という言葉が素直に身に沁みてくる。

この坂乃茶屋との縁は、僕の人生に大きく関わり、今の僕を成していると思われる。

四十二年前の細やかな縁を大切にしていきたいと、僕はいつも思っています。



店は色紙で埋まっていた

雑記 ごまめの歯ざしり

災害

昨年十月、台風十九号による豪雨で長野県も水害に見舞われた。千曲川やその支流などの河川が決壊し多くの家屋が浸水した。一時五十四か所の避難所に六千二百余りの方々が避難されていったという。

水害から一週間後、長野市の松代町で床上浸水した家屋の清掃や家具の処理などのボランティアに行かせていただいた。二階建ての住居は、一階部分が床上メートルの浸水。居住者の方は一人暮らしの男性（八十歳）で、水害以降老人施設で生活されていて昼間だけ自宅の片づけに来ておられた。

水に濡れた畳はすでに処分されていたが、まだいくつかの家具が残され、その中にある一つひとつの物を取り出しては必要な物なのか聞いてごみ置き場に運ぶ。その一つひとつのやり取りの中で時には昔話に花が咲くこともあったが、一年前に奥さんを亡くされたばかりで奥さんの私物を整理することなく災害に遭ってしまったともらされた。ご主人は決して寂しい思いを面に出さず、今日出会ったばかりなのに昔からの知り合いのように私たちを受け入れて下さった。そんな中で休憩時間に出して下さったリングの一切れが、災害現場にいたことを忘れさせてくれた。やっと私も長野県人になったのだと感じた瞬間でもあった。

現在は、避難所が閉鎖され仮設住宅などに入居されている方々もまだ大勢おられる。時折テレビでは「ワン・ナガノ」ということが流れ完全に復興するまでがんばろう！という雰囲気伝わってくる。今、新型コロナウイルスという得体のしれない災害？が起こっている。世界中が一丸となつてこの災害に立ち向かって行くことを切に願う。

（会報委員 上村 明美）

昨年のきょうさん愛知大会の特別分科

会では200名をこえる参加者と「家族依存」についての議論を深めた。大川理事長がシンポジストとして話された部分は2019年11月号ですでに報告している。エゼル福祉会が障害当事者の自立を支援する場合、家族の介護力、家族との信頼関係が重要になっている。分科会の抄録から家族の問題を考える機会にしてほしい。

今の日本では、障害当事者の多くは、家族に依存しながら生活している。一方で、家族も同様に何十年にもわたり、障害のある当事者から離れられず生活している実態がある。

障害当事者の高齢化・重度化が進んでくる中で、「家族の高齢化」「家族依存」は、より深刻化している。「介護の限界」「親亡き後」「老障介護」「自助共助」から家族がどう抜け出していけるのか。障害当事者の自立だけでなく家族の自立や、楽しみ、生きがいをどう作り出していけるのか。

基調報告概要 藤原里佐

アドバイザー 北星学園大学短期大学部教授

「障害者家族のノーマライゼーション」「障害者家族の当事者性」「障害者家族は特別な家族ではない」などの観点から、家族も当事者もどのように豊かに生きられるか…

● 家族依存のしくみ ●

1970年代以降歴史的に作られてきた「障害者の家族」像は「子どもの成長は親次第」「障害児の母親は頑張るのが当たり前」とされていた。福祉制度・サービスマニユー

が充足してくると「家族はそんなに大変ではないのでは」と思われるように変化している。意思決定支援の必要な子どもの場合、家族がコーディネーターの役割を果たさざるをえず、家族に依存することを前提とした制度設計になっている。そしてその制度が、今度は家族依存を強化する仕組みに働いている。

● 家族への介護の集中と健康被害 ●

そうした中では主な介護者である母親は親であることに加え、医療・福祉・教育の面で専門職レベルの技能を求められている。そして過重な負担による健康被害に至るケースも少なくない。障害が重くなればなるほど他者に任せられないからだ。

一方で、家族の人権、家族の生活の質、家族のノーマライゼーション（当たり前の生活）を追及することで、当事者の生活の質や均衡を崩すことも起こりえる。それを危惧し、家族は子どものことを優先し、自分たちのこ

とは後回しになりがちだ。だからこそ家族に当たり前の生活を、という支援が必要だ。

●くらしの場の移行、成人期以降のところ●

障害者の家族の場合、一般の家族の育児と違い役割が固定化し、長期化する。グループホーム（以下GHとする）や施設などへくらしの場や日常生活が移行しても、基本的なADL（日常生活動作）は他者にある程度ゆだねることができても入院や大きな手術、治療などの大きな判断は親の役割になっている。そんな中、家族に病気などあったときに、一気に均衡が崩れ、当事者も不安になる。制度が充足してきたとしても、障害者の社会参加が進む一方で、家族の人権や生活、健康というのは、障害者支援の場で議論しにくい。

高齢の障害者家族の実態調査の中で職員側の意識と家族の意識でギャップがあることがわかった。衣食住やサービス、建物、職員の配慮などの安心があったとしても、家

族の不安が残る。実は福祉先進国であるフィンランドでさえも親の心情的な悩みは日本と共通してある。

●家族の多様性●

家族の多様性を障害者の家族にも尊重すべきだ。20歳から高齢期までいつ自立するのが良いのか、家族によってそれぞれであり、地域の社会資源の違いもある。障害のある子どもが成人後もケアが必要であって、高齢期になっても役割が逆転しないのも障害者家族の特性だ。本人を大事にしつつ、家族のノーマライゼーションを実現していくのか、どうすすめるのか、ということが課題だ。

●家族のノーマライゼーション実現に向けて●

・親が長年担ってきた役割を尊重しつつ、誰にどのように分散していくのかを検討する。

・障害者家族が普通に暮らすために支援が必要であることを確認する。

・家族の自立観や選択肢の多様性を尊重する。
・成人期の支援を豊かにし、家族と当事者のタイミングでサービスが使えるように制度設計をする。

・親亡き後も、障害者の在宅生活を支える仕組みをつくる。

シンポジスト 中村杏奈

（特別支援学校教諭）

要旨

私は2019年3月に大学を卒業し、現在は特別支援学校で働いています。私と父、母、重度の知的障害の弟の4人家族です。父と母は愛知県の離島出身で、年子で重度の知的障害の弟が生まれました福祉のサービスが整っている名古屋で生活するに至っています。弟は現在21歳です。

本題の「家族依存」という言葉は、とても力のある言葉です。施設やGHなどではなく、家でみていたい、他人に任せられない。それ

が父母だけでなく、兄弟児にも降りかかっているのではないだろうか。

大学には、兄弟の会がありました。クローズの会とオープン会の。月に1〜2回、クローズの会はメンバー（障害兄弟児）だけの会です。オープンの会は、障害兄弟児でなくても、障害の有無にかかわらず参加できます。ここで同じ悩みを持つ仲間や、多様な意見にも出会い、兄弟への思い、将来の考えが深まりました。

兄弟の悩みでよくあがっているテーマが2つあります。一つはおつきあい、結婚についてです。パートナーとその家族との関係で、障害のある家族を受け入れてもらえるか、おつきあいも兄弟優先に考えてしまいます。もう一つ、兄弟にとって最大の悩み、親亡き後についてです。いつまでも親が健康でいることはあたりまえでないと思っています。成年後見制度についても勉強不足です。親が介護

できなくなったときに、どうすればいいのか、親が管理してきたお金のことについて、福祉サービスのこと…親は兄弟に任せようとしています。さらに兄弟は情報難民になります。親同士は情報共有できても、兄弟では共有することができていません。

● 兄弟も豊かに生きていくために ●

最後に、兄弟も豊かに生きていくために、3つのことを掲げたいです。

- ・自分の人生を大切にしていくこと。
- ・悩みを相談できる居場所が必要なこと。
- ・親亡き後の備えや情報収集が大切なこと。

《参加者からの質問》

Q・親が子どもの自立を受け入れられない

A・ 障害のある子どもと親が、それぞれ自立しにくくなっている原因の一つとして、「育児と介護の連続性」があります。子育て一般においては、親が責任をもって行う規範が強いのですが、成人したからと言って、障

害者家族の場合、それを本人に任せることもできず、社会化することもできず、結局、親の頑張り依存する形になっています。「育児を親がするもの」とするのなら「介護は社会化すべき」ということになります。「育児と介護を連続させない」ことが大切です。

Q・当事者の高齢化と老親の介護について

A・ 障害当事者は、親の介護は無理、という考え方ではなく、今後障害持っている方も、親の見送る役割・権利、親に寄り添う支援も必要なのではないか、と考えています。どういう役割かは別にしても、障害者も一人の家族のメンバーとして、母が認知症になったとか、寝たきりになったとか、何か果たせる役割はないか、と思う気持ちは非常にノーマルな考えです。「障害を持つているから難しい」とか「自分のこともできないのに親の介護なんて大変でしょ」ではなく一緒にいるだけでも安心できるかもしれないし、息子の姿を見

て力が湧くかもしれないということです。この問題と絡んで、制度がないために、そうした利用者の意を汲んで、施設職員がボランティアで行っていることも少なくありません。

☆ アドバイザーによる分科会のまとめ ☆

● 頑張らなくてはいけないのは、

● 家族ではなく地域 ●

家族は役割を十分果たしている。それをフオーする形で、当事者や家族のために、法人・事業所・職員としてスタッフも知恵と力を出していく。行政に対してはもう少し整理をして、実行性のある政策提言にしていこうとが必要だ。研究者の一人として、私も努力していきたい。

もう一つ、がんばってほしいのは、地域。障害者の地域生活を保障とか、当たり前のごくらし、と表現・スローガンにしている。地域という言葉には多義性があり、定義されていない。地域生活を送るといった時に、地域に

迷惑かけません、地域に負担をかけませんというのを条件に土地を貸してもらいGHを建てているのが現実だ。信頼できる人を見つくる、家族以外の人と仲良くする、といった時に、もつと地域のひとと、信頼とまではいかなくとも、適切に接してくれる人がいないと、地域生活に限界を感じる。

地域で暮らすことが迷惑をかけないことや地域に負担をかけないことにすると本当の意味での共生にならないのでは。特別な支援や配慮は専門職がすることだが一市民として、住んでいる人を温かいまなざしで見守ってもらう、心配なら本人にも声をかけてもらうことが必要だ。

● 障害福祉サービスと

● 介護保険サービスの「いいいどり」 ●

介護保険になったらどうなるのか、切実な問題だ。65歳になったからと言って、移行することが、その人にとってプラスになるこ

とがあるのかなのか。知的障害の方で、70代でも80代でも、日中活動されている人がたくさんいる。その方たちは本当に医療介護が必要になったときに、どこで暮らすか、という選択は問題になるが、少なくとも日中活動は、長くなじんだ場で仲間がいて安心できるように、障害も介護も「いいいどり」するような働きかけをする時期になってきている。

● 家族のノーマライゼーションと

● 家族役割の分散化 ●

障害者の家族のノーマライゼーション、という点においては、家族は十分役割を果たしていることをねぎらいつつ、どういったら、家族の役割を分散化できるか、無理やりとったりするのではなく、家族の人生の大事な時間をどう使うのか、ということに寄り添う機会ができればと思う。

全職員研修

福祉避難所について

生活支援部 久野 穂



2月の研修の前半部分は、防災に関するものでした。昨年12月にVOLON歌里が福祉避難所の指定を受けており、開設に向けた準備や運営をどのように行うのが課題となっていました。その為今回は名古屋市の職員に来ていただいて、福祉避難所についての説明をしてもらいました。これは市の、「市政出前トーク」という制度を利用して行ったものです。

福祉避難所は発災直後から運営できるのが望ましいかと思いますが、正式に開設するまでに時間を要するので4日目を目標とする事になっています。福祉避難所として開設した場合、食料品など物資の支援を市から受けられるようになります。またVOLON歌里の場合は建物全体が福祉避難所の指定を

受けているのではなく、2階の研修室が指定されています。

名古屋市指定の福祉避難所は、小学校等の通常の避難場所では生活が送れない人を避難させる「二次的避難場所」になります(※)。その為、誰でも避難できる場所ではありません。またバリアフリー化された避難場所の提供が目的であり、介護や医療的支援が受けられるというものではありません。従って基本的には要支援者と一緒に避難した人が支援を行うことになります。

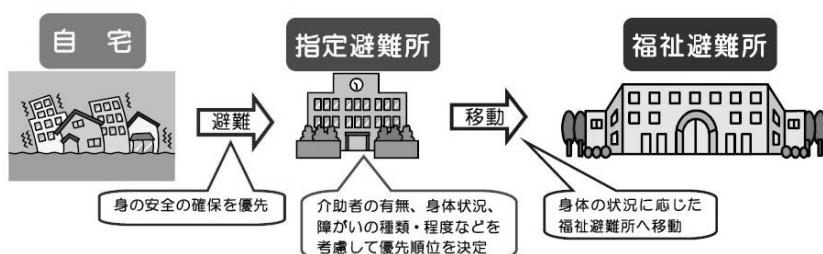
エゼル福祉会では毎年防災に関する研修を行ってきましたが、避難所に関しては今回が初めての学習会でした。ここ愛知県では、大きな地震がいつ発生してもおかしくないと言われ続けています。また近年では、台風による水害により避難生活を余儀なくされるケースも出ています。VOLON歌里も水害の危険性が高い地域にあります。災害に対する備えは必要不可欠です。

今回学んだことは避難所の開設までの手続きや運営上の注意点などであり、実際に運営できるかどうかは法人内での備えに左右

※今回解説した福祉避難所は、あくまで名古屋市での取り決めによるものです。市町村によって避難所の区分方法が異なるので、二次的避難所が福祉避難所のことを指さない場合もあります。

要配慮者もまずは通常の避難所へ避難することになります。そこで福祉避難所の対象者が振り分けられ、小学校等の指定避難所（福祉避難スペース含む）での避難生活が困難な方が福祉避難所へ避難することになります。

されます。具体的な話が聞けたことで、自分たちが来ていない部分があると気づくことができました。今後課題を整理して、具体的な対策を進めていきます。



由紀ちゃんとの出逢い

写真家 長谷川 友子

由紀ちゃんが中学生の時、私は愛知県立名古屋特別支援学校のバスに乗っている障害児の添乗介助をしていました。その仕事を去る時、このご縁を繋ぎたいと思い手紙が書いて会話のできる由紀ちゃんに文通の申し込みをしました。返事が来ました。『障害者の世界以外の人と友達になりたい』と。そして文通が始まりました。

私は初めの頃は、由紀ちゃんができないのに、いろんな所へ行ったりとか、そこで楽しかった事などを書く事に抵抗がありました。でもそんなことは関係ないのだと思うようになりました。バレンタインデーの時、由紀ちゃんはチョコレートを届けたい人がいま

した。『兄にもお母さんにも頼めないのをお願いします』と。私は恋のキューピットになったみたいでワクワクしました。他にも『相手の方はスヌーピーが好きらしいので、それに関する物を買って届けて欲しい』と。いつ頃からか、『家に遊びに来て欲しい』と書いてあつて家を訪問。お母さんに会い、2人の会話の横で由紀ちゃんはいつも話を聞いていました。何度かそんな事が続いて、もう手紙を書く必要がなくなりました。

20才の頃、A J Uの体験入所の時、夜に由紀ちゃんから電話がありました。もうその頃から24時間の自分の介護者を自分で探していました。『今夜は介護者が見つからない。来て欲しい』と。『私に出来るかな』と思いながら由紀ちゃんのアドバイスを受け入浴を手伝い、一晩泊まりました。

その後、レスパイト事業「コンビニハウス」の設立が始まりました。1年の実績を積みめば、名古屋市補助金が付く予定でしたが叶いませんでした。”何としてもお金を作らなく

ては”『私に出来る事は？』。私は活動が開始した時から記録を撮影していました。その写真で写真集を作って売ろうという事になり、写真集『もしもし、こちらコンビニハウス』が出来ました。その時『由紀ちゃんの写真がなくてはダメでしょう』という事で、1人暮らしをしていた彼女のマンションの部屋へ。私は「解禁、カイキン！」と言いながら、由紀ちゃんを撮影しました。以前、由紀ちゃんは私に『写真を撮られるのが嫌い』と言った事があり、それ以来、由紀ちゃんにカメラを向けなかったのです。ですから、その時の写真が唯一の由紀ちゃんの写真です。





由紀ちゃんの葬儀（2020年1月3日）
 が終わった次の日に長い間、仕舞っていた由紀ちゃんからの手紙の束に目を通しました。13才から18才までかと書いてある文字も、幼さから大人の文字に。小学2年から書き続けていた（と書いてある）19編の詩集ノートもありました。由紀ちゃんが、自分の人生を考え始める時期に由紀ちゃんと出会い、その後の由紀ちゃんの驚くような活躍を遠くから見せてもらっていました。

由紀ちゃんの詩集より2編を皆様にお送りします

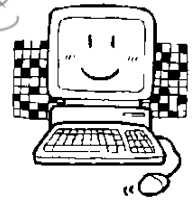
～ 死後の夢 ～

私の命が果て
 死の世界へ旅立ち
 もし もう一度
 生の世界にもどれるなら
 今まで
 私が知らなかった世界
 体のどこにも障害のない
 健康な体の世界に
 私は一度でいいから
 普通の人と同じ生活をしたい
 他の人から
 不思議な目で見られない
 もし そんな世界が
 死後に待っていたら
 私は早く死んで
 そんな世界へ
 飛びこんで行きたい

～ 道 ～

人生の道
 うしろをふり返りながら
 1日に1歩ずつ
 ゆっくり歩いて行く
 失敗をした時は
 1歩 さがり
 成功した時は
 いつもより
 余分に前に進む
 山道のように
 上がったリ
 下がったリ
 石につまづいたり
 でも、けして休むことの出来ない
 人生の道
 これからも
 一歩、一歩

事務局コーナー



「ご協力ありがとうございました」

1月～2月（敬称略・順不同）

★ ご寄付いただいた方々

(NPO 法人コンビニの会)

※会報購読料1万円以上お振込みの方

竹沢芙美子

★ 物品寄付をいただいた方々

(コンビニハウス)

石原正寅 石原まち

(WILL・VOLO)

安永麻里

★ 地域サロンボランティア

石原春佳 半田素子 竹内里美

小出美穂 高橋里依 佐藤美紀子

田中 咲 安江奏恵 竹内しおり

田中奈穂子

★ 活動にご協力いただいた方々

(コンビニハウス)

石原正寅 辻本道子 黒田隆広

藤本菜見 大森 信 楠村ゆき

石原まち 寺西 剛 鈴木千春

伊藤翔磨 松本浩希 山川尚輝

村上梨央 森岡佳乃 藤本由紀子

岩崎桃佳 樋口美穂 酒井まみ子

和田遥香 吉岡将吾 茂手木利典

田邊利徳 上野友志 近藤友紀子

佐脇涼太 隅田 豊 磯村みづき

犬飼佑輝 東原光江

(VOLO) 須田たみ子

★ 会報発送ボランティア

半田素子 丹羽正子 佐藤美紀子

春は心身の乱れに要注意!

日本には四季があり、気温が変化する季節の変わり目には自律神経バランスが崩れ
体調を崩しやすくなりがちです。

心身のバランスを整えるには…

1. 生活のリズムを整える

十分な睡眠をとって目覚めたら朝日を浴び、朝食をきちんと摂ることで体内のリズムが整います。

2. 心身のリラクゼーション

休日には何もしない、のんびりした時間も必要です。プライベートも忙しくし過ぎないように気を付けましょう。

3. 免疫力を高める食品を摂る

春菊→緊張緩和によい かぼちゃ→老化やがん予防 バナナ→便秘予防 山芋→疲労回復

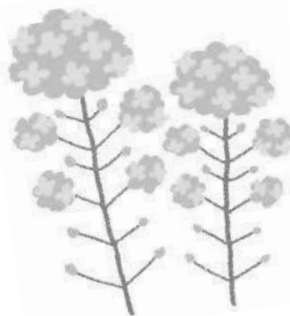
ヨーグルト→ビフィズス菌が大腸がんの予防に役立ちます。

しょうが→ジンゲロールという辛味成分が免疫力を高めてくれます。

納豆→ビタミン・カルシウム・たんぱく質・イソフラボンなど栄養抜群の食材です。

2 月

- | | | | |
|-------------|---|--------|---|
| 8 日 | 愛障協 名古屋市との懇談会(渥美) | 5 日 | 会報会議 |
| 8. 15. 22 日 | 行動援護研修(土田) | 5 日 | 給食会議(大川・伊藤・曾我・桑名・奥村) |
| 9 日 | きょうされん会議(佐藤) | 5 日 | 愛光園見学(大川・伊藤) |
| 9 日 | 生活支援部主任会議 | 5. 6 日 | サービスマニエール研修(木村) |
| 11 日 | サロンうたさと開催
(演奏者 ヴァイオリン DUO 清水里佳子・中西美知子) | 7 日 | 廣瀬先生ケースワーク会議 |
| 10 日 | サービスマニエール更新研修(溝口・榊原) | 7 日 | 就労支援研修(北島) |
| 13 日 | WILL/VOLO 祝日開所 | 8 日 | サロンうたさと開催
(演奏者 ギター&バンジョー&フラットマントリン 我聞) |
| 15 日 | 看護師会議
(大川・伊藤・佐藤・高木・坪内・谷口・井口) | 11 日 | WILL/VOLO 祝日開所 |
| 21 日 | 施設長会議 ウィンクあいち(伊藤) | 13 日 | 事務局会議 |
| 22 日 | 会報発送 | 17 日 | 生活支援部主任会議 |
| 22 日 | 通所主任会議 | 18 日 | 福祉施設事業所防災セミナー(渥美) |
| 23 日 | 通所親の会 | 18 日 | 医療知識研修(稲垣) |
| 25 日 | サロンうたさと開催
(演奏者 オボエ&ピアノ 宮沢花おり・佐々木杏子) | 20 日 | 暮らしの場交流会(木村) |
| 26 日 | 就職フェア(溝口・野村) | 20 日 | 事務局会議 |
| 27 日 | 南養護学校訪問(曾我・高木) | 20 日 | 西養護学校生徒 WILL 見学 |
| 29 日 | 名古屋特別支援学校保護者 VOLO 見学 | 22 日 | 全職員研修 |
| 29 日 | 自立支援協議会 防災(伊藤) | 22 日 | サロンうたさと開催
(ジャズシンガー 司 いづ子・ピアノ演奏 鎌田浩史) |
| 29 日 | 社会福祉協議会 防災研修(久野) | 25 日 | 菓子製造 HACCP 講習会(大野) |
| 30 日 | ウエルジョブなごや 工賃説明会(伊藤) | 26 日 | 通所主任会議 |
| | | 27 日 | 通所親の会 |



『地域サロンうたさと』 2月22日の様子

今回はジャズシンガーの司いつ子さんとジャズピアニストの鎌田浩史さん！
心地いいピアノに優しい歌声で、うっとり癒されたひとときでした。
みんなで歌ったりもして和やかな雰囲気♥
司さんのトークも楽しかったですよ！
生のジャズ演奏は、なかなか聞く機会がないので新鮮でした♥
既に次回を楽しみにしているお客様もチラホラ...
すぐ満席になりそうですね。



『 My Favorite Things 』をみんなで歌いました♪



司いつ子さんと鎌田浩史さん

WILLのお菓子どうですか？

常連のご近所さん(*^-~^*)

【 銀行口座 】

三菱UFJ銀行 小田井支店 店番 238 (普) 口座番号 1440108
特定非営利活動法人 コンビニの会

【 郵便振替口座 】 番号 00800-2-35190 コンビニの会

ご意見・ご質問・お問い合わせは下記までお寄せください。

障害のある人たちの地域生活を支援する

特定非営利活動法人

〒452-0807 名古屋市西区歌里町 147 番地

コンビニハウス Tel (052) 502-7731

Fax (052) 505-6082

コンビニの会

理 事 宮川 優子

U R L <http://ezeru.sakura.ne.jp/>

E-mail convini@beach.ocn.ne.jp

